

---

## デジタルパンク通信 第二十三話

---

Q 5年でしょうか。千年でしょうか。

A 千年です。

葎屋町通中立売上ル。ここに京都西陣町家スタジオがあります。西陣には町家と呼ばれる古い様式の家屋がいまも点在してます。その一軒を改装して、コンピュータ配備して、スタジオにするプロジェクトです。アーティストたちがコンテンツを創造するブロードバンド基地。京都府や京都造形芸大などがオープンしたものです。

ビジュアル系中心で、音楽の取組みが弱いなど、まだやるべきことがたくさんあります。でも、新旧の融合や、アナログとデジタルの結合によって、新しいエネルギーを静かに育む場になりそう。

実はここは母の実家の近所なんです。ここまで来たついでに、母の友人の和服屋を訪れて、着物みつろってもらいました。和服屋といっても普通の民家で、畳にいくつか反物を広げて選びます。でも、その家だけで用事は済みません。帯屋さん。下駄屋さん。羽織のヒモ屋さん。近所のオジサンがゾロゾロやってきます。みな専門職で、きっちり分業されているのです。

茶菓子をいただきながら、お話をうかがいました。いやほんま不景気でっせ。みんなヒマでんねん。そやからお客さん来たらこないして集まりまんねん。景気わるいときはこないしてじっとしてまんねん。さっぱワヤでっせ。そや、天ぷらでも食べような。おごったるがな。

不景気といいながら、みなとても幸せそうです。

デジタルの波はここにも押し寄せています。いにしえの紋様や色づかいを活かし、ネクタイやスカーフ作りに乗り出す若い衆もいるといいます。製造工程にITを導入して、コンピュータでデザインしたりして、コストダウンを図るところもあるといいます。でも、そこは匠。まだまだ圧倒的なアナログの世界です。役立つ道具をそれとなく導入するだけ、という感じ。

西陣の旦那たち、景気のいいときは、祇園に繰り出すそうです。でも、その程度なのだそうです。いいときに売れた分を貯めておいて、悪いときにはじっとして取り崩す。大きくなったり小さくなったりすることなく、ずっと同じことを数百年つづけるモデル。

チャンスをつかかって業容を拡張する。M&Aで事業規模を拡大する。まずくなったらリストラだ。シェア1位を目指し、5年で上場を果たす。スピードが死命を制する。独り勝ちの法則だ。競争だ。アメリカや東京ではそんな話ばかりですが、ここにいると、そんなドグマはぶざまにさえ思えます。さっぱワヤでっせ。ぶつぶつ言いながら、みんなで分け合って千年生きる。これって強烈。アナログの千年が終わって、デジタルの千年が始まります。でも、その千年は、西洋近代の進化主義で進んでいくとは思えません。

---